

周辺といかに向き合うか

大江元貴（青山学院大学）

1. はじめに

■ 問題の所在

- 文法記述が周辺現象にまで及ぶということは、多くの場合その領域における典型的現象の記述が一定の到達点に達したということの証であり、研究の前線を押し広げる試みとして歓迎すべきものである¹。また、個人の研究活動としても、典型的現象を扱う場合には膨大な先行研究の知見の蓄積を踏まえた上で独自性を打ち出していく必要があるのに対して、周辺現象は記述の蓄積がそれほどない場合が多く、〈新規性〉を訴えやすいというメリットがある。

(1) a. 【典型】動詞や名詞など概念的な意味内容を持つ語類 ↔ 【周辺】感動詞や応答詞など談話場の状況と密接に結びついた語類

b. 【典型】「太郎が来た後に次郎も来た」のような“累加”の「も」 ↔ 【周辺】「太郎ももう二十歳かあ」のような“詠嘆”の「も」

- 他方で、周辺であるがゆえに伴う難しさもある。特に(1)に挙げたような文法研究においてすでに一定の地位を確立している周辺現象ではなく、ほとんど未開拓の現象を主題に据えて文法記述を行おうとする場合には以下のような困難に向き合う必要がある。

(2) a. 【記述の難しさ】当該の現象がそもそもどのような現象であるか文法研究の中に定位し、分析の視点や道具立てを模索するところから始めなければならない。探索的に進める部分が大きくなる分、記述の〈明瞭性〉を確保するハードルが高くなりやすい。

b. 【意義づけの難しさ】周辺現象は往々にして使用場面や話者の属性などの面で強い制約がかかる。なぜわざわざそのような制限色の強い現象をとりあげるのか、単なる落穂拾いと見られないような（できるだけ多くの研究者に面白いと思ってもらえる）訴え方が求められる。

¹ あるカテゴリーにおいて何らかの基準である対象を中心に据えたとき、その中心事例と共有する特徴が多いほど「典型」、共有度が下がるにつれ「周辺」に位置づけられる（cf. 仁田 1995）。したがって、何を「典型／周辺」と見るかは、どのようなカテゴリーを想定し何を中心に据えるかによって変わり得るものと考えられる。(1)についても言語研究の進展の経緯の中で「典型／周辺」に位置づけられてきたという意味合いで提示するものであり、一方が言語研究にとってより重要であるとか言語にとってより本質的だというような価値づけの意味合いは含まない。

■ 本発表のねらい

- 周辺の終助詞を扱った大江（2018）において発表者がどのような「記述の難しさ」「意義づけの難しさ」を感じ、その困難にどのように向き合ったかを紹介しつつ、周辺現象を主題とする文法研究における“よい”記述について検討する。

2. 事例の紹介

- 大江元貴（2018）「現代日本語共通語における終助詞が、ダ」『日本語文法』18(2)
 - (3) a. そんなことしたらだめでしょうが。
 - b. 嫌だよーだ。

■ 「記述の難しさ」「意義づけの難しさ」

- 文法記述は通常、規則性（パターン）に関する一般化を含むものであり（cf. 森山 2010、窪田 2019）、規則性の抽出には何らかの比較が不可欠。
- 終助詞の文法研究では、対立的な終助詞の比較、終助詞が後接しうる文としない文の比較、終助詞がある文とない文の比較などを通して、終助詞がどのような意味を表しているかを特定していくという方法が採られることが多いが、「が」「だ」はそのようなアプローチが難しい。
 - (4) a. 「寒いよ。」 vs. 「寒いね。」
 - b. 「食べたさ。」 vs. 「?食べようさ。」
 - c. 「寒いね。」 vs. 「寒い。」
- 「が」「だ」と意味的に同類あるいは対立する終助詞が見当たらない上に、前接する文のパターンが極度に限られるため、様々な文を比較検討することができない。
 - (5) a. 「が」：「...推量形+が。」
 - b. 「だ」：「...よーだ」 or 「{ふん／いー／べー／へへーん} だ。」
- 「が」「だ」がある文とない文を比べても、意味がそれほど変わらないように感じる。
 - (6) a. そんなことしたらだめでしょう {が/∅}。
 - b. 嫌だよー {だ/∅}。
- 以上の困難性は、「が」「だ」は他の終助詞との接点を見出しにくく、使用可能な統語環境が極めて限定され、意味的貢献も小さい、ということを示している。
- そのような言語形式をそもそも終助詞とみなして良いのか？そのような孤立した形式をとりあげて分析することの意義とは？

■ どのように向き合ったか

- 「が」「だ」を典型的な終助詞群と比較し、心的態度を「付加する」終助詞に対置される、心的態度を「顕示する」終助詞として位置づける。
 - (7) 終助詞には、先行する発話と独立して認められる独自の心的態度を先行する発話に新たに「付加する」ものと、先行する発話によって表明される心的態度を「顕示する」ものがある。が、ダは「顕示する」終助詞の典型である。(大江 2018:91)
 - 前接形式が極端に限定されること（：統語的限定性）、前接する文で表される態度と同じ態度しか表さないため常に省略可能であること（：意味的依存性）、それ自体が「が」「だ」の特徴。
 - ただし、「顕示する」の内実については必ずしも明瞭ではなく、「顕示する（際立たせて示す）」というのがどのような意味論的・語用論的なふるまいなのかに関する具体的な議論は行っていない。＝〈明瞭性〉の点での課題
 - 「終助詞は心的態度を表す」と言われてきたが、その表し方に少なくとも異なる 2 つのタイプがあるという新しい理解の仕方ができるようになった。
 - 付加タイプは全て動詞基本形につくという事実は当たり前すぎてこれまで少なくとも明示的には言及されていなかった。＝「典型性の再発見」
 - これまでの終助詞記述（ひいては文法記述全般）が「付加」的な捉え方に引っ張られすぎていたのではないかという問題に気づく。＝「暗黙の前提の発見」
 - (8) ① 質問・反問 「おや、今朝はどうしたんだい？」
 - ② けいべつ、さげすみ、投げやりの気持をこめた反ばく 「なににいてるんだい」
 - ③ 語気を強める。念を押す気持 「火をつけろい」
- (国立国語研究所 1951: 10)
- (9) 「太郎ももう二十歳かあ」の「も」自体が詠嘆を表しているわけではないという指摘（榎原 2018、西畑 2022）

3. 周辺といかに向き合うか

■ 「周辺現象」といかに向き合うか

- 周辺現象の文法記述の意義の 1 つに、「文法分析・文法記述のきめの細かさを高める」(仁田 1995:48) ということがあるが、これはどちらかと言うと周辺「も」観察することの意義。周辺「だからこそ」の意義を考えると、その醍醐味は既存の記述が前提とするパラダイムの相対化・更新を促す潜在力の高さにある（定延 2000）。
 - (10) 「周辺主義」
 - 周辺に置かれている現象がすべてそうだというわけではないが、それらのうち

一部の現象は、既成の理屈では根本的に説明ができない、つまり理屈に合わない現象だからこそ、そのような周辺の扱いを受けていると考えられる。したがって、言語研究の前提を掘り下げようとする時には、こうした『周遍的』で『非合理的』な現象に着目することが有効である。 (定延 2000: 7)

□ 終助詞の周辺現象の事例その 2

- 子供を相手としたモノログでは、既存の「よ」の記述には収まらない（不自然になることを予測する）「よ」の使用が観察される。「よ」における周辺現象(11)は、既存の「よ」の記述があくまで「成人同士の対話」を前提としていたことを浮き彫りにするとともに、「よ」の文法は談話ジャンルごとに異なりうるという文法観を取り入れることを要請する（大江 2024）。

(11) はじめまして！僕の名前は「ごみぶくろう」だよ！みんな仲良くしてね！

[豊中市伊丹市クリーンランド「ごみぶくろうのページ」https://www.city.toyonaka.osaka.jp/ku-rashi/gomi_risaikuru_bika/cleanland/sosiki_gaiyo/gomibukurou.html 2024年9月30日最終閲覧]

(12)?? [自己紹介場面で] はじめまして、(僕の名前は) 田中ですよ。

- register, dialect の性格を色濃く持つ現象は、現代日本語共通語の文法研究においては周遍的な位置に置かれ記述が後回しにされる傾向にあるが、だからこそ、そのような現象を排除して蓄積されてきた文法記述の前提や限界を浮き彫りにする大きな可能性を有する。今後、記述文法研究が踏み込んでいくべき周辺領域の 1 つ (cf. 野田 2011)。

□ まとめ

- (13) 周辺現象を主題とする文法記述の“よさ”（優位性）は、その現象の記述や意義づけを難しくしているのはそもそも何なのかという問題にまで立ち戻ること最大限に活かされる。

■ 「周辺現象研究」といかに向き合うか

- 「記述の難しさ」を克服するために新たにどのような視点や道具立てを導入したか、「意義づけの難しさ」を乗り越えて典型的現象を含む全体の体系や既存の研究が依拠するパラダイムをいかに更新したか、といったところまで提示できればなお良いが、そこまでいかずとも、まずは周辺現象が伴う問題を共有すること自体の価値を積極的に認めるべきである。
- 周辺現象に向き合う際に生じる難しさをどのように克服するかは一研究者が一論文内で負うべき課題であると同時に、研究コミュニティで分かち合うべき課題である。
- 「記述の難しさ」「意義づけの難しさ」の克服までを常に求めることは、周辺研究への参入障壁を高くし、結果的に「周辺」を「周辺」のまま放置させることにもつながりうる。

参照文献

- 榎原実香（2018）「文の階層構造から見たもの周辺用法の分類」『日本語文法』18(2), pp.110–126, 日本語文法学会.
- 大江元貴（2018）「現代日本語共通語における終助詞ガ、ダ」『日本語文法』18(2), pp.76–92, 日本語文法学会.
- 大江元貴（2024）「子供向けモノローグに現れる特異な「よ」」『日本語文法』24(2), pp.3–19, 日本語文法学会.
- 窪田悠介（2019）「理論的研究とは？」衣畑智秀（編）『基礎日本語学』pp.260–282, ひつじ書房.
- 国立国語研究所（1951）『現代語の助詞・助動詞：用法と実例』集英出版.
- 定延利之（2000）『認知言語論』大衆館書店.
- 西畑宏紀（2022）「いわゆる詠嘆のモをめぐる」『日本語文法』22(2), pp.3–19, 日本語文法学会.
- 仁田義雄（1995）「文法における規則性と例外的現象」『日本語学』14(4), pp.42–51, 明治書院.
- 野田春美（2011）「『現代日本語文法』からみた日本語の記述文法の未来」『日本語文法』11(2), pp.17–29, 日本語文法学会.
- 森山卓郎（2010）「考えるときの舞台裏—「記述」の段階を中心に—」『日本語学』29(2), pp.14–20, 明治書院.

付記

本稿の内容は、JSPS 科研費 JP20K13046 の研究成果の一部である。